資料1－1



マアジ（太平洋系群）①

マアジは日本周辺に広く生息し、本系群はこのうち太平洋側に分布する群である。

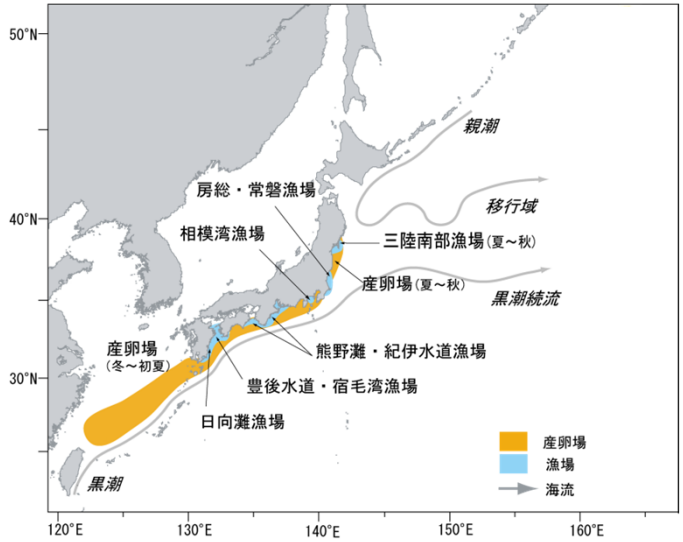


図1　分布域

太平洋側の沿岸域に広く分布する。太平洋沿岸域で生まれた集団と東シナ海で生まれた集団で構成されると考えられている。

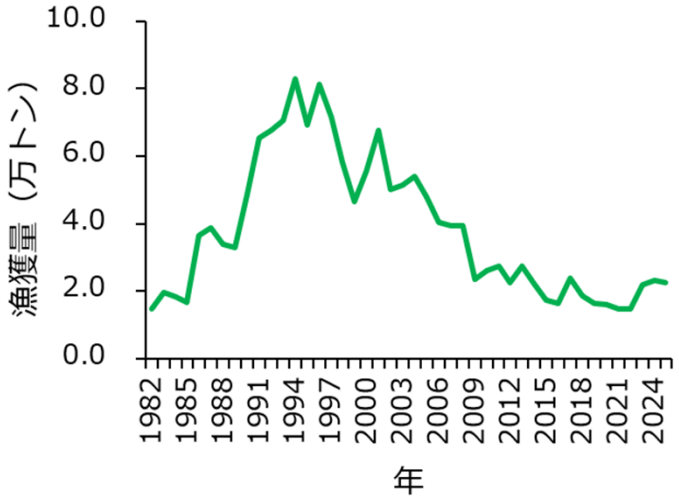


図2　漁獲量の推移

漁獲量は、1980年代後半以降、増加傾向を示し、1993～1997年には7万～8万トンで推移した。その後は減少傾向に転じたが、2022年から再び増加傾向に転じ2025年は2.2万トンであった。

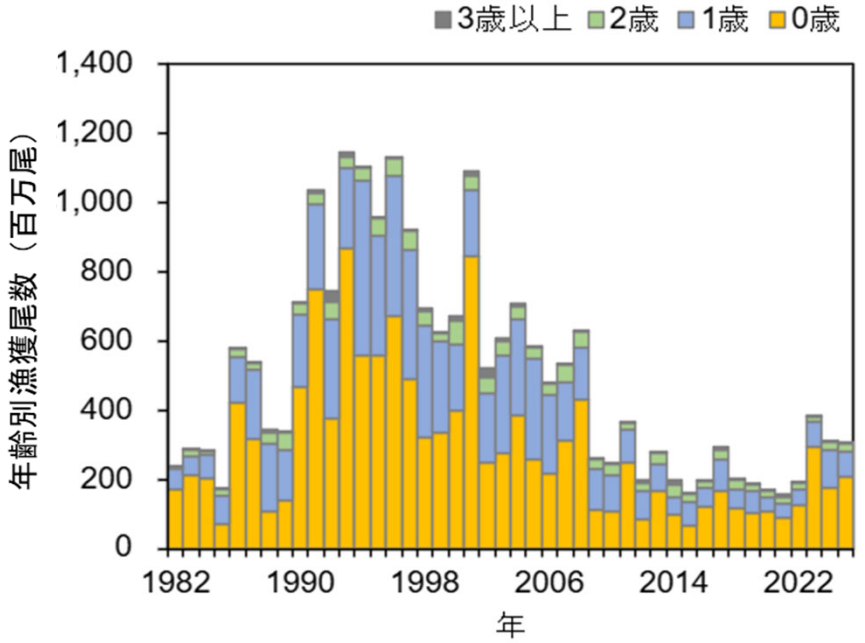


図3　年齢別漁獲尾数

本系群の漁獲の主体は0歳魚と1歳魚である。0歳魚の漁獲尾数は、宮崎県～高知県で多い傾向にあり、1990～2008年に特に多かった。しかし、2015年には最低の0.7億尾となり、その後は横ばい傾向で推移した。2023年には3.0億尾と再び増加した。2024年1.8億尾、2025年は2.1億尾であった。

マアジ（太平洋系群）②

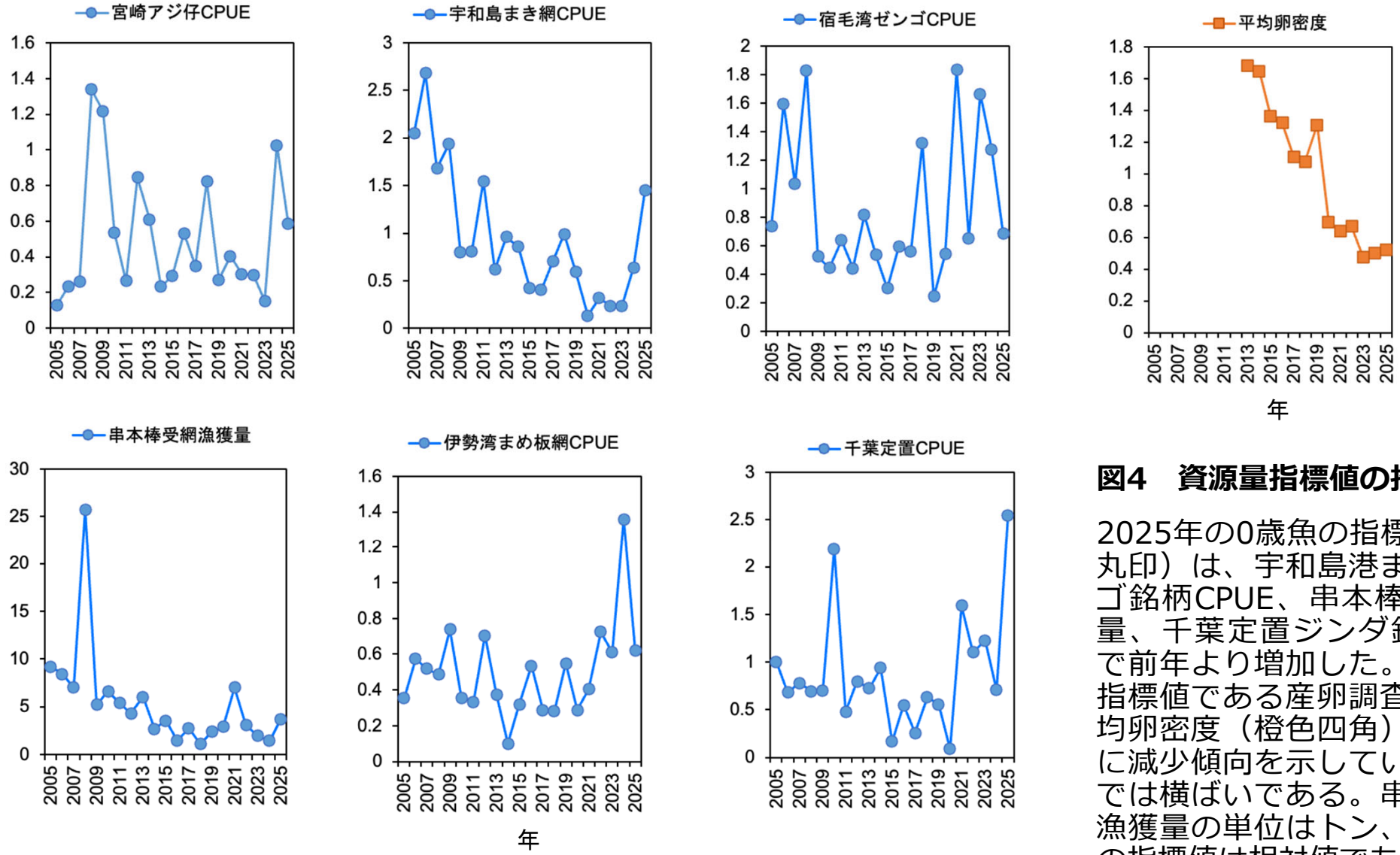


図4　資源量指標値の推移

2025年の0歳魚の指標値（青色丸印）は、宇和島港まき網ゼンゴ銘柄CPUE、串本棒受網漁獲量、千葉定置ジンダ銘柄CPUEで前年より増加した。親魚量の指標値である産卵調査による平均卵密度（橙色四角）は全体的に減少傾向を示しているが近年では横ばいである。串本棒受網漁獲量の単位はトン、それ以外の指標値は相対値である。

マアジ（太平洋系群）③

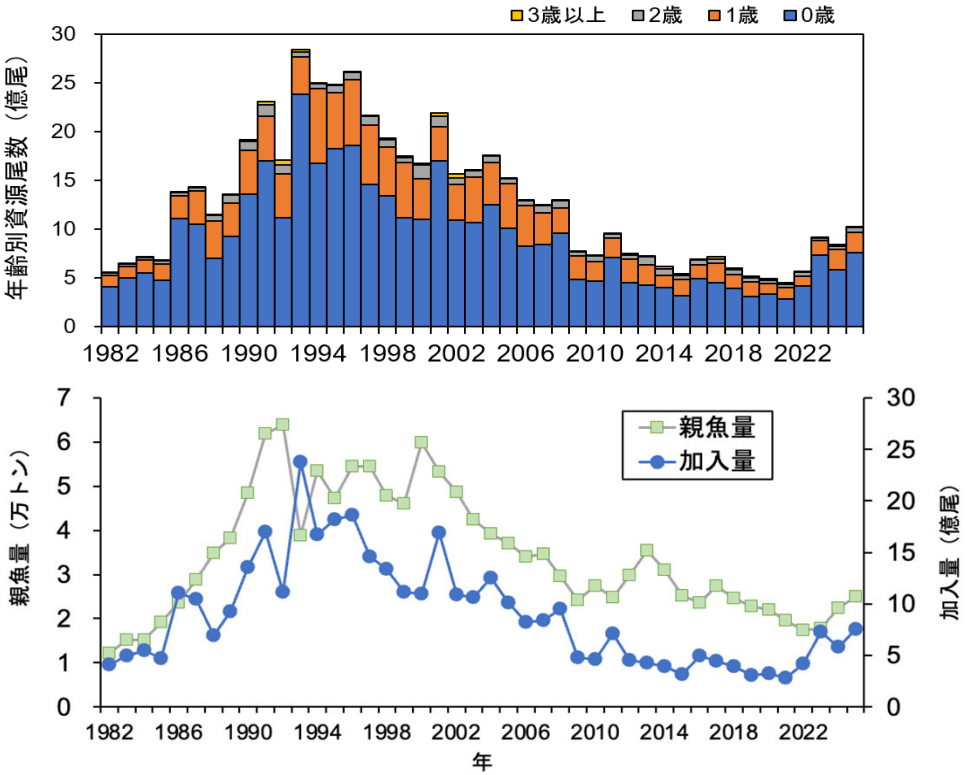


図5　年齢別資源尾数、加入量、親魚量の推移

資源の年齢組成を尾数でみると、0歳（青）、1歳（オレンジ）を中心に構成されており、2歳魚以上（灰、黄）が占める割合は少ない。

親魚量は、1982年以降増加し、1992年に最高値の6.4万トンとなった後、2001年以降は減少傾向となった。近年は横ばいで推移しており、2025年の親魚量は2.5万トンと推定された。加入量（0歳魚資源尾数）は、1993年に23.8億尾と最大になった後に減少傾向となったが、2023年に増加し、2025年の加入量も2023年と同程度の7.5億尾と推定された。

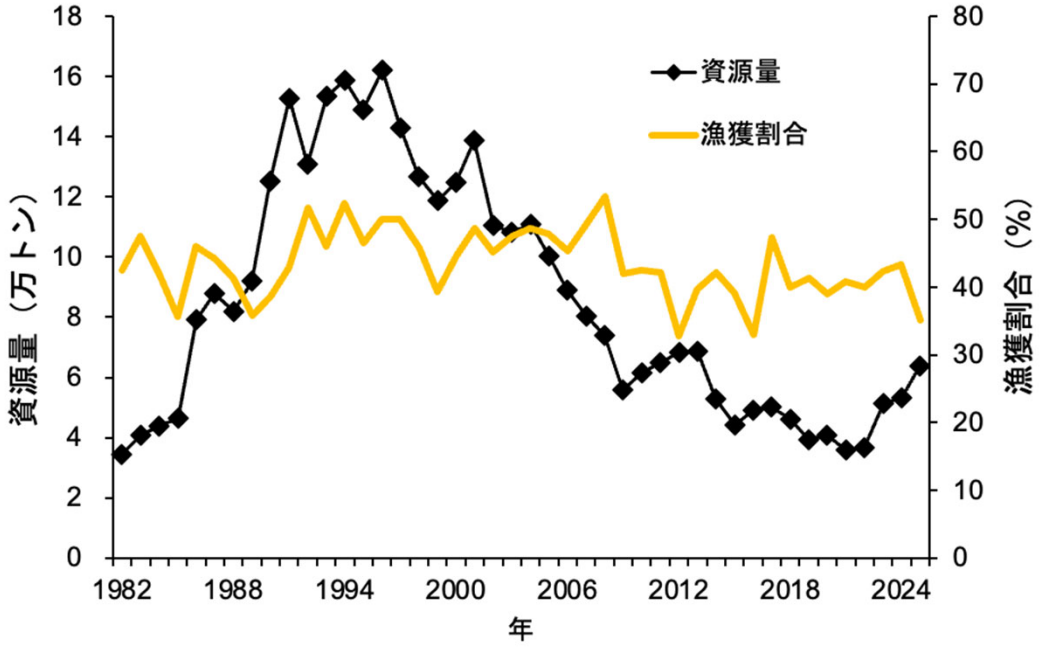


図6　資源量と漁獲割合の推移

資源量は、1996年に16.2万トンとなった後、減少に転じ、2021年には3.6万トンとなった。その後2023年より増加し、2025年の資源量は6.4万トンであった。漁獲割合は1982年以降33%~53%の範囲で推定しており、2025年は35%と低い値であった。

マアジ（太平洋系群）④

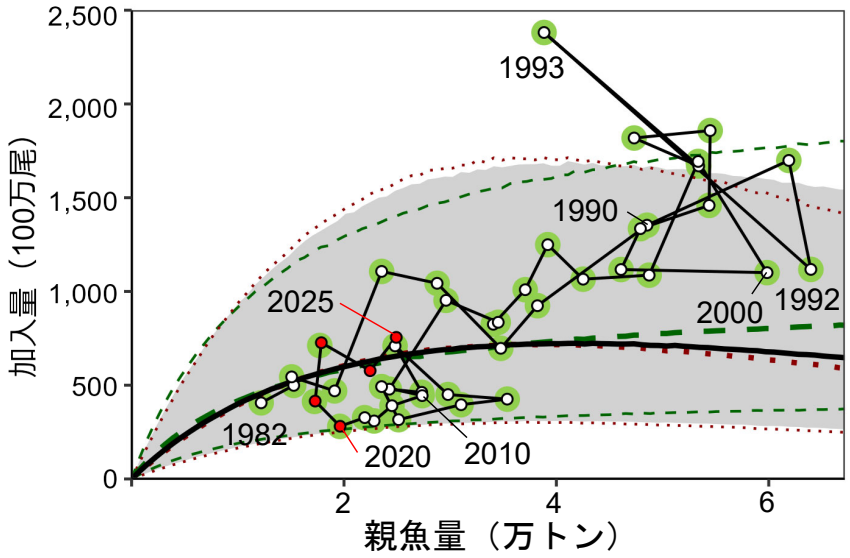


図7　再生産関係

1982～2023年の親魚量と加入量に対し、リッカー型（赤点線）およびベバートン・ホルト型（緑破線）の再生産関係のモデル平均（黒実線）を適用した。図中の太線は各再生産関係もしくはモデル平均の予測値である。細線は各再生産関係の下で、灰色領域は適用したモデル平均の下で、加入量の90%が含まれると期待される範囲である。

緑丸は再生産関係の推定に用いた観測値、白丸および赤丸（直近5年間）は2026年度資源評価の観測値である。

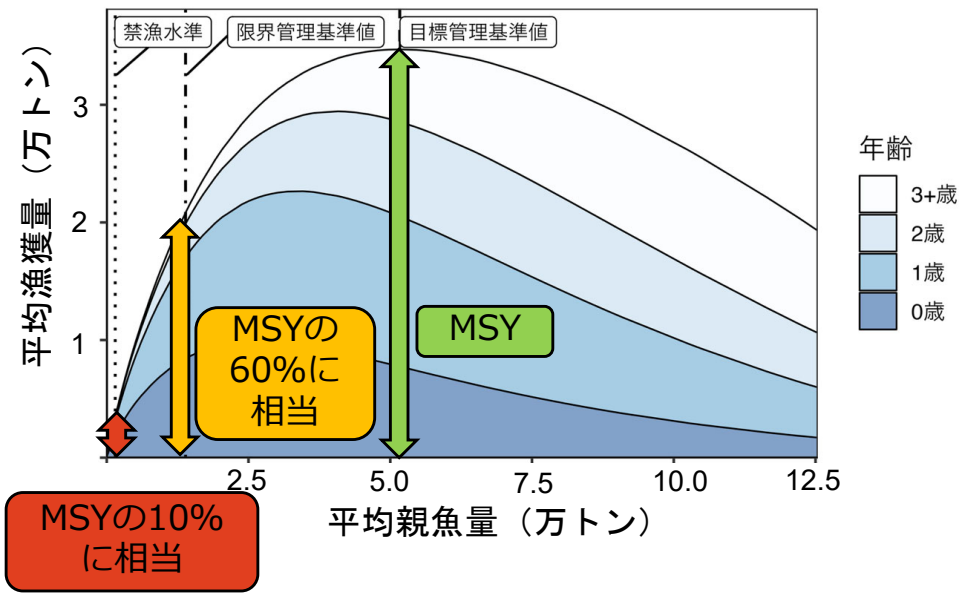


図8　管理基準値

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は5.2万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2025年の親魚量	MSY	2025年の漁獲量
5.2万トン	1.4万トン	0.15万トン	2.5万トン	3.5万トン	2.2万トン

マアジ（太平洋系群）⑤

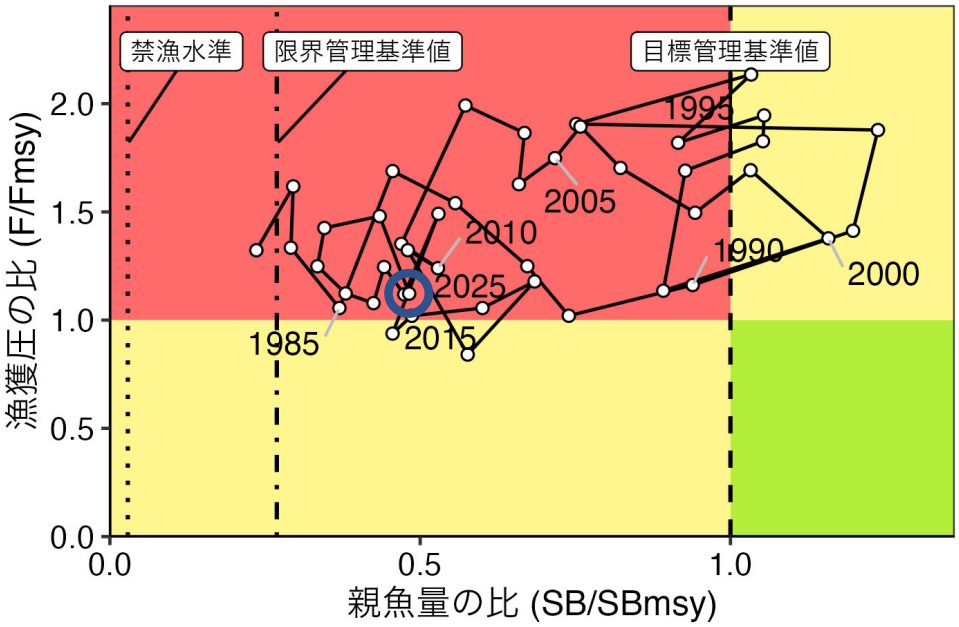


図9　神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、1991～2001年にかけて断続的に最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を上回った。漁獲圧（F）は、SBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を2012年と2016年を除いて上回っている。2025年の親魚量はSBmsyを下回り（0.48倍）、漁獲圧はFmsyを上回った（1.12倍）。

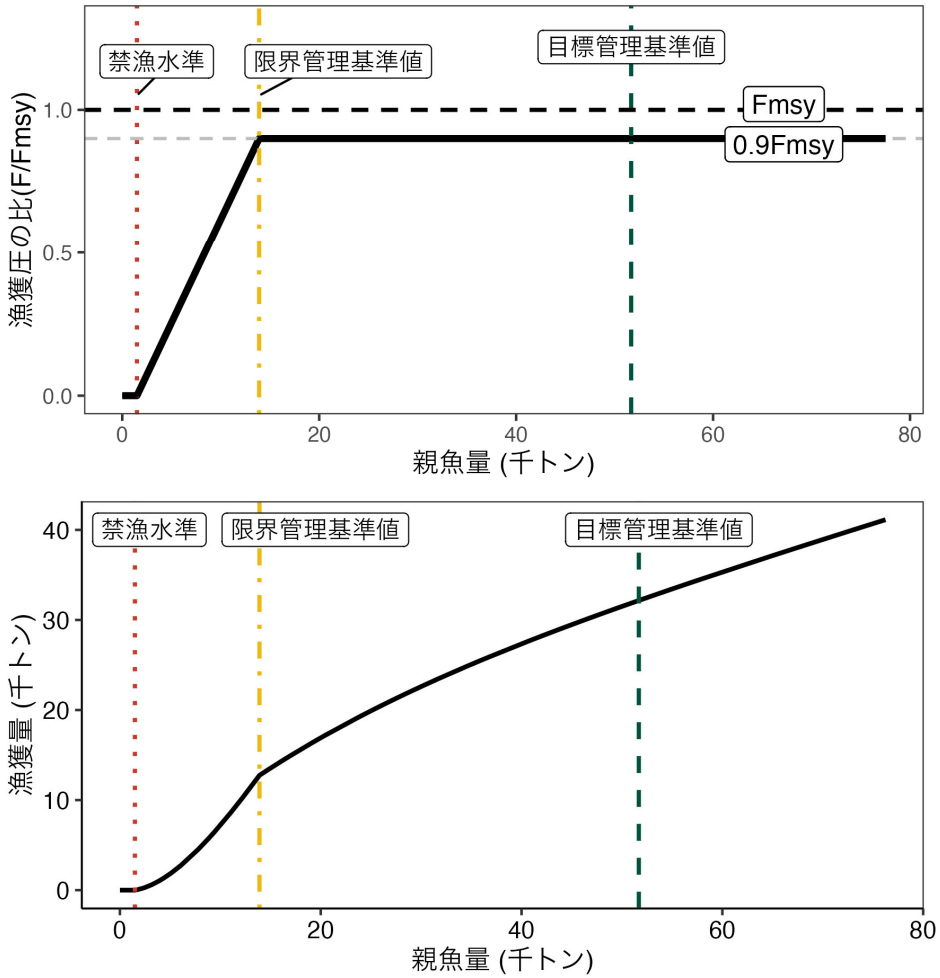
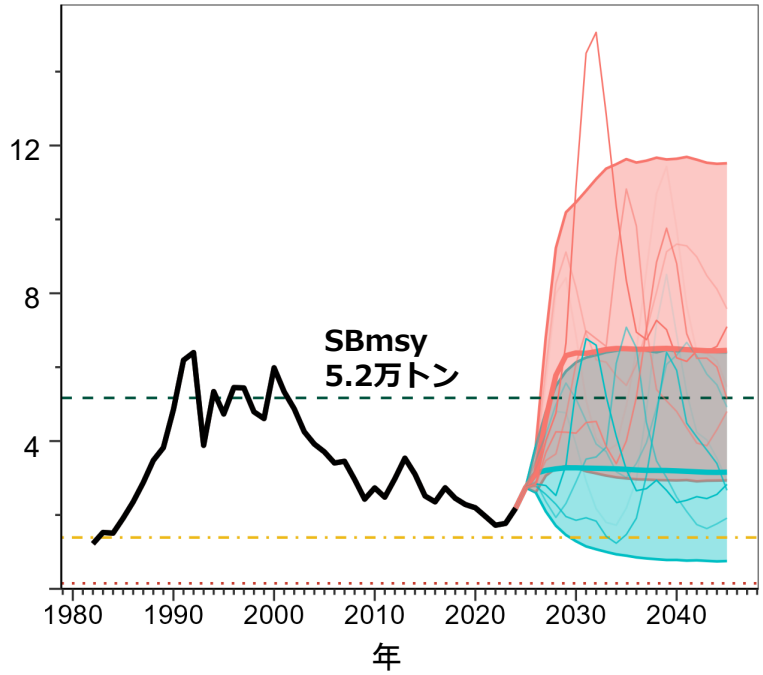


図10　漁獲シナリオ（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

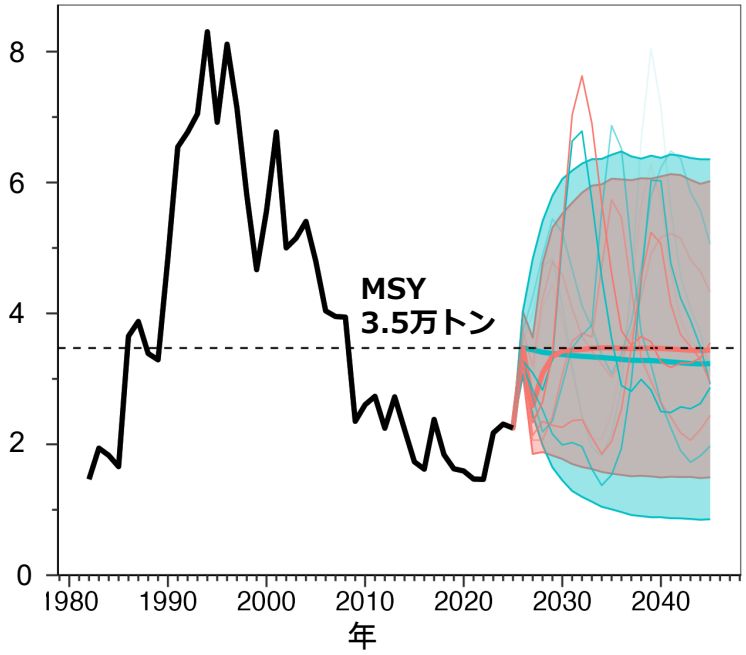
漁獲シナリオ（調整係数であるβ=0.9）を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

マアジ（太平洋系群）⑥

将来の親魚量（万トン）



将来の漁獲量（万トン）



漁獲シナリオに基づく将来予測
（β＝0.9の場合）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

MSY

目標管理基準値

限界管理基準値

禁漁水準

図11　漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

漁獲シナリオ（β=0.9）に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

平均値としては、親魚量は増加した後、SBmsyを上回る水準で推移する。漁獲量も増加した後、MSY水準付近で推移する。

マアジ（太平洋系群）⑦

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2036年に親魚量が目標管理基準値（5.2万トン）を上回る確率
1.0	3.6		4.4	4.9	5.2	5.2	5.2	5.2	5.2	5.2	5.2	45%
0.9		3.7	4.7	5.4	5.7	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	55%
0.8			5.0	6.0	6.4	6.4	6.4	6.4	6.5	6.5	6.5	66%
0.7			5.3	6.6	7.2	7.1	7.1	7.2	7.3	7.3	7.3	76%
現状の漁獲圧			3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	16%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
1.0	3.5	2.8	3.2	3.4	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5
0.9		2.6	3.1	3.3	3.4	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5	3.5
0.8		2.4	2.9	3.2	3.3	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4
0.7		2.1	2.8	3.1	3.2	3.2	3.2	3.3	3.3	3.3	3.3
現状の漁獲圧		3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3

漁獲シナリオ（β=0.9、赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2023～2025年の平均：β=1.35相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は2.6万トン、2036年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は55%と予測される。併せて、βを0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧の場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2027年のABC（万トン）	2027年の親魚量予測平均値（万トン）	現状の漁獲圧に対する比（F/F2023-2025）	2027年の漁獲割合（%）
2.6	3.7	0.66	32

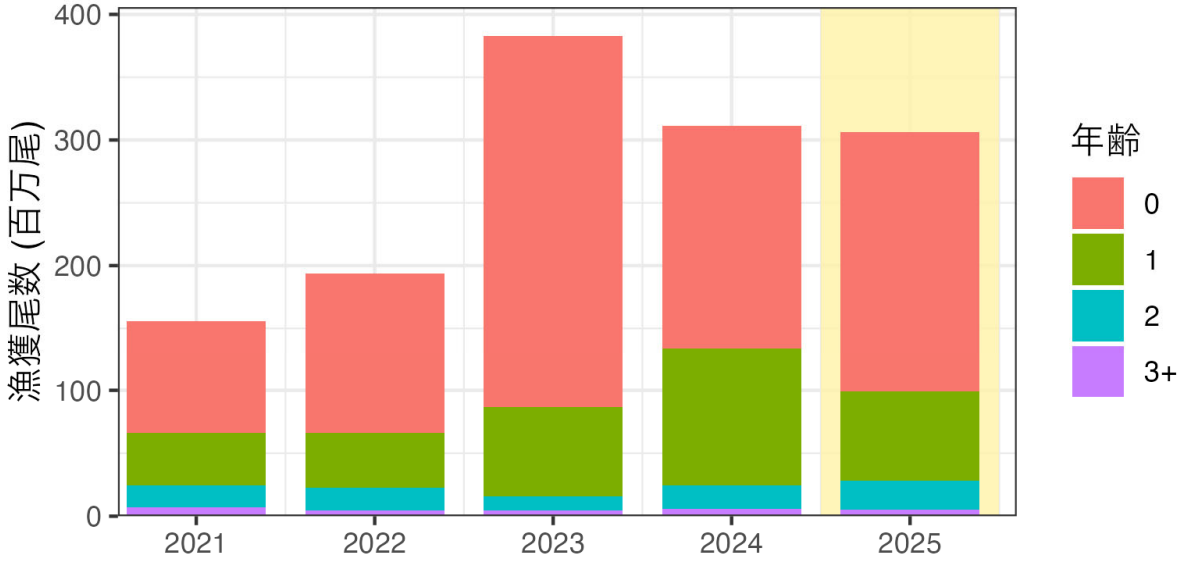
注：表の値は今後の資源評価により更新される。

補足：昨年度（令和7年度）評価結果からの変化とその要因

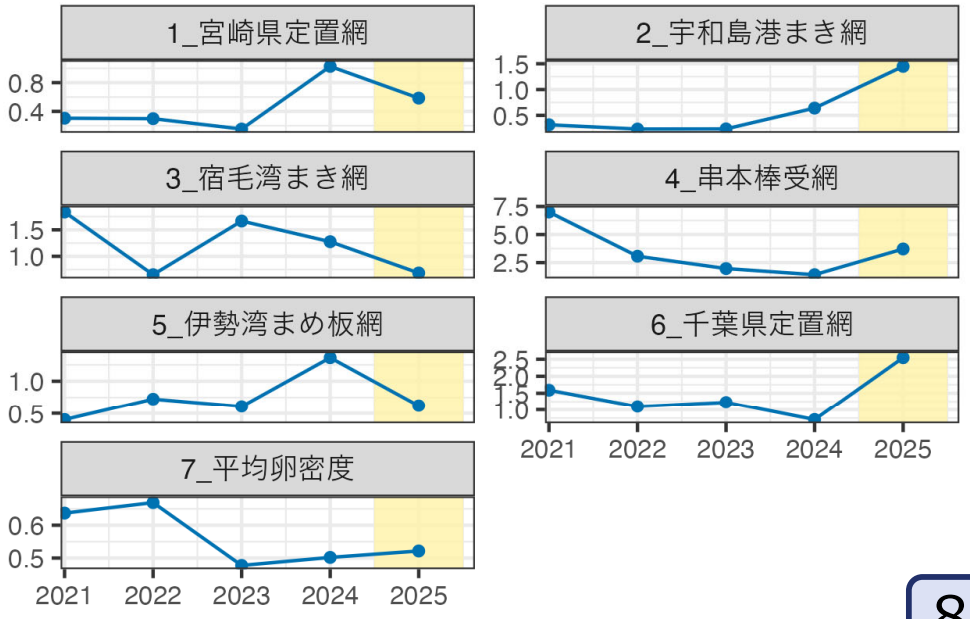
ポイント1：2025年のデータの追加

- 2025年の漁獲尾数は3.1億尾で、2023年以降の比較的高い水準が維持された
- 2025年の加入量指標値は、宮崎県定置網・宿毛湾まき網・伊勢湾まめ板網では前年を下回り、宇和島まき網・串本棒受網・千葉県定置網では上回った
- 親魚量指標値である平均卵密度は、近年は横ばい傾向

年齢別漁獲尾数



資源量指標値



補足：昨年度（令和7年度）評価結果からの変化とその要因

ポイント2：その他の主な変化とその要因

- 2025年の評価結果を予測値から推定値に更新
- 2026年以降の将来予測の親魚量と漁獲量の動向：おおまかな傾向としては大きな変化はなく、2027年度漁期の漁獲量予測は2.6万トン
- 2024年の加入量は下方修正：2025年のデータが追加されたことによる

